

平成20年度 兵庫県外国人県民共生会議議事録

- 1 日時 平成21年3月3日(火) 15:45～17:45
- 2 場所 県公館第1会議室
- 3 議題 「定住外国人の子どもたちの日本社会での自立に向けて」

定住外国人は、日本に永く住まれて、2世、3世、4世になっている方、新しく日本に来られた方の大きく2つのグループに分かれる。各々に問題は違うのではないか。永く住んでいる方は、自分達の経験を踏まえて、新しく来られた方は、こんなこと、あんなことがあったとアドバイスを頂ければと思う。

兵庫県は、外国人高齢者への給付金、外国人学校への補助など、外国人支援策は、全国的にもトップレベルにある。すばらしい行政施策を展開していると思う。

しかし、外国人の子どもたちが教育を受ける権利という面では、新渡日の子どもたちの高校進学では、県は非常に厳しい壁がある。不安定な状況で仕事をしている保護者のもと、その子どもたちは日本語もおぼつかない中、中学で勉強を頑張っているが、お金もない、学力も上がらないで、進学を断念するケースも出ている。

そういう子どもたちに対して、アイデンティティや母語というのは非常に大切だが、日本への適応、日本で自立する力をつけることを考えた場合、渡日初期での手厚い日本語習得、日本語をきっちり身につけた上での学習支援が必要である。

もう一点、何度も議論されているかもしれないが、県職員や、教職員になるときに、国籍条項の部分で非常に高い壁がある。子どもたちに希望を与えるためにも、県が率先し県職員、教職員の国籍条項の壁を取り払って欲しい。

外国人のお母さんたちは、自分自身が日本語を話せない場合があり、子どもたちの日本語能力を測ることが出来ず、高校入試に失敗して初めて日本語の力が不足していることに気づく。もっと日本語教育が必要であるし、親にも日本の教育システムを説明して欲しい。

多文化共生サポーターまかせにしないで、先生が学科ごとに1年間に何を習得していかなければならないかを明確にし、外国人の子供たちに勉強をきちんと教えて欲しい。県は沢山の外国人支援をやってくれているが、指導者がその点を理解してきっちり教えられるかが問題である。

また、外国人の親は日本の教育制度や学費等の支援などについてよく知らないので教える必要があるし、留学生の奨学金はあるが、日本で生まれた外国の子供たちの奨学金制度がない、そういう支援があれば助かる。

いろいろな制度の問題で、進学や就職しづらい場合、優秀な子は欧米に逃げてしまう子が出てきている。日本の地域で活躍してもらうために考えて欲しい。

多文化共生サポーターは、渡日初期に集中的につけて欲しい。2,3年後くらいになると、あまり必要ではない。

また、日本に生まれ育った、日本語の話せない子どもにはつかない制度だが、サポーターが必要な子どももいる。

高校進学出来ない子どもが多いし、進学出来ても外国人であることで就職できないケースがある。このような壁を崩すためには、いろんな分野で協力し合わないといけない。

この兵庫の地で共生していくためには2つの条件がいる。まず、各外国人コミュニテ

自身の努力、そして、それを受け入れる県民の、外国人の歴史、文化に関して認識する努力が必要だと考える。

外国人学校に関して、同じ外国人学校に対する寄付でも、欧米系の学校は寄付金の税控除の対象となるのに、中華同文学校や朝鮮学校等は控除の対象とならない。これは不公平である。国に要望して欲しい。

県の一般職の採用に国籍の壁を設けていると、外国籍の方と共存しようと言っても、本当に説得力があるかどうかということが、根本的には問われている。

また、県の教職員で期限を付さない常勤講師ということで、いわゆる管理職、主任格にはなれない壁がある。日本の排外的になる風潮に対し、県は断固として、全ての外国人差別と戦うし、許しませんと、説得力ある形で宣言することが、外国人の子どもたちにどれほど勇気を与えるか。未来が少し開けるという形で、波及効果がある。

オランダ語の学校もあったが、お金の問題で去年なくなった。兵庫県にくるオランダ人も減り、外国人自体も減っている。

外国人は別と考えがちだが、もちろん日本人と違う部分もあるが、基本的に同じ人間。一人の人間としての扱いが大事。私たち外国人には選挙権がない、子どもたちが、いつか選挙権が持てるとなれば、日本に対する考え方、自分たちのまちに対する考え方変わってくると思う。自立に対して大きな影響があると思う。

それから、両親がオランダ人と日本人、中国人と日本人であれば、国籍を選ばなくてはならない。国籍を選択する考え方は古いと思う。ほとんどの国で多国籍を取得できるようになっている。

立派な言葉を聞いた。これをどう実現していくかは皆さんの力にかかっている。この地域は素晴らしい地域であることを教えている。子どもたちは地域の力になる。その地域を支えるため外国人学校協議会が今後どのように進むべきかご指導いただきたい。

我々の世代の在日朝鮮人の方は、医者には国籍による差別がないから良く出来る者は医者になった。公立学校の先生にはなれなかったから、教育学部に行く者は少なかった。やはり、小さい子どもが、自分が大きくなったら何になりたいかを考えたとき、なれない職業があるというのは大きな問題。そういう意味で制度に問題がある。

私は、差別是正のための積極的方策には賛成だが、今、例えば外国人が2%いたとすると、小学校の先生が100人いれば2人は外国人の先生だということで良いと思う。2%になるまで、外国人の先生を積極的に採用していくのがあってもよいと思う。

最後に、兵庫県の国籍条項が度々問題になるが、やはり、徐々に開かれているのは事実だが、一般行政職はまだ解放されていない、たとえば50職種のうち40職種解放したと言っても、一般行政職が解放されていないという分母と分子の問題で、我々はたえず気にしている。行政の方も職種が増えたということだけでなく、客観的な数字も含め全体として進んでいけばと思う。

今の目の前の大きな問題の解決策として、言葉の問題から大きな制度の問題まで出たが、言葉の問題で言えば、母語なのか、日本語なのかという議論でなく、一人の子どもが正確に言葉をはしゃげるようになるか、自分の言葉を身につけられるかという言語形成の視点でしっかり考えなければいけない。私たちが母語、母語と言っていた10年前には、日本語教室一辺倒な時代があった。その頃は、その子にとって母語というものを見て欲しかったが、だんだん、外国の子どもは、母語だと片寄ってきたことに逆に危惧を持っている。その子にとって、自分で考え、情報を得るのに、もっと言えば、その先の学問を修得するのに必要な言葉を正確に身につけているかを見ないといけない。

子どもたちが地域社会で成長する中で、外国人であるかどうかに関係なく、どんな子どもも同じスタートラインにたって、そして頑張れば認められるというようにしないとイケない。私たちの将来にも関わることで、子どもたちの進路を考える場合に大切なこと。頑張っても認められないなら、やはり頑張れないので、そういう意味では国籍条項のことなどいろんなことを含めて考えていかなければいけない。それは外国籍だからという以前のもので、子どもたちが、この社会でしっかり生きていける力をつけるかという意味で、例えば自閉症の子どもさんも同じことで、大切な教育の原点ではないかと思う。教育委員会は何ができるか、行政は何ができるか、市民団体は何ができるか、当事者は何ができるか、そういった具体的な話になっていけばと思う。

目の前で困っている現場の話から、構造的な話まで、いろいろ出たが、そこをつないで行くことが重要だと思う。まず大きな話からすると、日本の中の多文化共生についても、そろそろ、顧みる地点に達しているように思う。当初は多文化主義に関して、差別を是正する構造的な改革をするものと言われていたが、楽しいもの、お祭りごとのようなもの、文化を奉って行くものによって変わって行って、それがために構造的な差別が見えにくくなっていると言われ始めた。いろいろな問題があるが、新渡日者の支援がなされる中、歴史的マイノリティの観点が見過ごされがちで、政府のレポートの中にも言及が少ない。言語が話せない、日本語が話せないという方への支援は比較的大きく取り上げられている。

母語支援もいろいろ目的がある。本国に帰ってから必要なものとして位置づけるなら、そのために公的な支援をすると反感も買うし、そうではなく、親子のコミュニケーションを図るため、マイノリティのアイデンティティを育てるものとしての位置づけが重要である。その上で、現場で行っている支援を、子どもたちの将来像を描く上で、どうやっていくのかということが重要である。その上で、特定の職業に就けないとか、いろんな不利な状況があって、公立高校に入り難いなど、制度的に改正して行く必要があるのではないかと、先程の構造上の問題と、現場で子供に夢をもってもらおうといったことに繋がっていくのではないかと。

2つのことを思った。一つは、「共生」という言葉は、外国からこられた方、日本人も含め、どう自己実現が出来、社会参加を含め、充実した生活を送るかということがひとつの目的であると思う。こういう議論、外国人のためと言うこともあるが、日本人のためにも真剣に考えないとイケない。例えば差別、日本人同士でも差別がある。外国人への差別に対しても、日本人としても考えなければならない。もう一つは、文化を考えると、世界的に見て、多文化に対する理解が日本人は不得意なのだと思う。日本はまだまだ鎖国状態のように、人の交流が少ない国である。しかし、神戸は外国人と触れ合うことができる街であり、これからは、新しく外国から来られた方がもっと住みやすく、働きやすい場所にして交流を促進すべきである。

このようなことから見て、これからの日本は、例えば国籍条項等の問題は日本人のための問題であるとの認識を持って、直していくべきものは直していくという気概と勇気を持って真剣に取り組んでいかなければいけないと考える。

大きな話があった。国籍条項の問題、現在の国際化の進展を考えると、国籍による制限の撤廃についてもそろそろ新しい検討を考えていくべき時にきているのではないかと考える。

兵庫県は、日系ブラジル人、ペルー人にとって、仕事がある所だが、愛知県の方からも仕事を求めてやってきている。その中で、南米系の子供たちが学校で増えているのかどうか、そんなデータはないのか。もう一つ、定住者には奨学金がない。子どもたちが小学校、中学校、高校、大学と育って行く中で、奨学金を何かの方法で考えて

いかなければ、祖国に帰ってしまうし、大学を出たとしても外国へ行ってしまう。

ある病院から電話があった。兵庫県に外国人の医療費の未回収分を補填する制度があった。おそらく西日本でも兵庫県だけ。全国でも3、4の府県だけに外国人医療費補填制度があったが県に聞くと、その制度は無くなったと言われた。制度の運用が少なかったのかもしれないが、無くなったとしたら、政策として後退である。再度、検討してほしい。

この景気の悪化の中で、各自治体がそれなりの経済政策を打って行くと思うが、兵庫県の特色、外国人の就労実態を考えた時、在日コリアン、その在日コリアンのもとで働くベトナム人のケミカルシューズ産業、姫路の皮革産業にもベトナムの人が多く働いている。マイノリティー産業、外国人を支えて来たケミカルシューズ、姫路の皮革産業などの産業労働対策も是非考えていただきたい。もっと大きな話をすると、景気が悪くなると、いろんな意味で保護主義が出てくる、日本人も就職出来ないときに国籍条項を撤廃するなんてと、企業もそういう話になると思う。

是非、これから景気対策を考える時に、外国人がどういうところで働いているか、どういうところで生活の糧を得ているのか、そういう視点も含めて考えて頂きたい。

シューズとか皮革とか県が持つ地場産業は大変すばらしいものがあって、宝の山と言っているが、宝も磨かないと光らない、どう光らせるかに知恵を絞っている。例えば、ブランド化、高付加価値化、神戸のシューズ、あるいは姫路の皮革など、みんながあこがれるものを作って、発信していく、みんなが認知されるといったことを一生懸命やっている。

もう一つは、神戸海港140年、海外の文化がたくさんこの神戸に入ってきた。そういう歴史の中、定住されているオールドカマーの人たちによって、いろいろな文化が花を開いている。やはり文化の持つ力は、大きな力を発揮していくときに大切と考える。文化に対するリスペクト、文化が産業を生んでいくことになる。そういうことを含めて産業労働政策を考えて行きたい。

不況の時の話がでたが、今から30、40年前の不況時、最低限の労働を担っていたのが、在日韓国朝鮮人と被差別部落の方であった。不況になるとその2つで対立して最低限の仕事を奪い合うという感じだったが、2つは、共同して社会に立ち向かっていった。在日韓国朝鮮人の方と被差別部落の人が共同するようになった。今、不況だが、ポルトガル人、ベトナム人が仕事を奪い合う、新しく来た人達が最低限の仕事を奪いあうのではなく、いろいろな形で共同していくもののできているので、そういうことに留意して頂きたい。

華僑や、韓国の人もそうだが、神戸港開港140周年、その開港の時から、私たち華僑の先輩は、落地生根、居住した国で根を生やして生きている。だが、生やしているようで、生やしていない。いろいろな発言をずいぶん遠慮している。定住権は与えられているが、その国の法改正や政策の変更によって、いつ切られるかわからない。子どもの教育の話であったが、参政権の話もあった。民団の方たちは、働きかけを積極的に行っているが、華僑は、勝手にこちらへ来ているので遠慮している。子どもたちを、子どもたちの教育をどうするのか、日本、兵庫県をどうするのかは、日本の皆さんの問題である。皆さんがどういうグランドデザインを描いて、兵庫県をどうしていくのだという所に立って、方向性を決めて行かなければと思う。そうすることで歩んでいけるのではないかと思う。

子どもの教育のことで、いろいろご意見きかせて頂いた。ご意見の中で、こちらもいろいろ考えなければならぬことも沢山あった。教育とういことについて、生きる

力を与えるとうことで、根底の部分で共通認識ができたと考える。

ただ、学校現場の教育方針であるとか個々の適切な指導がどうあるべきか、今後、指導して行かないといけない部分もある。

グランドデザインをどう描くかということだが、皆さんが、兵庫県への愛着があること、誇りや思いなどの熱意も伝わってきた。できるだけことはやっていきたい。我々も同じ思いでやっているのでもよろしくお願ひしたい。各論では、遅々として進まない部分もあるが、しっかり手を携えてやっていきたい。

今日は、皆さんが兵庫県に愛着があり誇りに思っただけにしていることが伝わってきて、震災時の外国人県民復興会議を思い出した。今日もいろんな課題が出てきたが、このような厳しい時期だからこそ、いろんな新たな課題が出てくると思うが、これからは外国人県民と日本人県民が協力して地域の発展に努めていきたい。すぐにできること、どうしても時間がかかることがあるかと思うが、我々は皆さんのお話を真摯に受け止めて考えていきたいと思っただけにしているのでも今後ともよろしくお願ひしたい。